

インドネシア・アチェの被災資料のその後

業務課修復係 丸山 正広

1. はじめに

平成19年2月24日より2月28日まで、インドネシア・アチェ州において、州立公文書館と州立博物館を当館修復室の有友至と丸山正広で訪ねてきた。また3月1日はジャカルタのインドネシア国立公文書館を訪れた。

今回のインドネシア視察は、以下の目的に沿って行われた。

平成18年度に東京外国語大学の招聘した、インドネシア・アチェ州都バンダアチェからの2名をスマトラ島沖地震による津波被災資料の修復研修を行うため、国立公文書館で受け入れた。研修は平成18年7月18日から8月18日までの1か月間、基本的な資料修復から、現地の資料の状態に合わせた方法まで、当館修復室において実技研修を行った。今回、彼等の下を訪れ、帰国後に当館での研修の成果が、被災資料への修復において役立っているのかを視察すること。また2月24日から同27日の期間、バンダアチェにて行われた「第一回アチェ・インド洋学国際会議」に参加すること。そしてインドネシア国立公文書館では真空凍結乾燥法を用いたアチェの津波被災資料の修復を視察すること、以上である。



2. アチェにて

2月25日、26日は「第一回アチェ・インド洋学国際会議」へ参加した。

26日の「言語・文化・社会」のセッションで、東京外国語大学副学長の宮崎恒二氏による『文化財の再構築：津波被災後のアチェ写本』と題した発表があった。

その中で、「東京外国語大学は、21世紀 COE プログラム『史資料ハブ地域文化研究拠点』のもとに、アチェ文化財復興支援室を2005年3月に設立し、インドネシア側の専門家ならびに日本の国立公文書館などの専門家と協力し、アチェ写本文献の修復・保存事業を支援した。2005年にはジャカルタ、アチェにおいて現地専門家に対する研修を行い、2006年にはアチェから専門家2名を招聘して研修を行った。」という発表



発表中の宮崎副学長

があった。この研修には当館に於いて行われた修復技術の研修が含まれている。

2月26日はアチェ州立公文書館を訪れた。建物は改修工事により、外観はきれいな状態に直されており、内部は一部修繕作業中の箇所も見受けられた。玄関を入ると津波による被災直後の写真パネルが展示されている。写真から被害の深刻さが伝わってくる。

迎えていただいたのは研修に来日したリニィ氏と、館の修復室のスタッフの方であった。はじめにダマンフリ（Damanhuri）館長の下へ案内された。挨拶の後、津波被害とその後について伺った。

館長によると「津波により、泥水となった海水により建物の一階部分が水没した。これによって目録データの入っていたコンピューターが破壊された。現在は目録の作成を優先的に行っている。また写真などを含む3.5㎡の修復できない資料を破棄した。職員は11名が亡くなり、家をなくした職員も多数いる。被災資料は初期に洗浄したものは残っている。洗浄には70%のエタノールを使用した。（被災後は）復興局と協力して災害時の訓練を行っている。また津波についての様々な記録を住民などからも集め、保管している。今回の被災を期に津波だけでなく、GAM（自由アチェ運動）の武装解除の記録など様々な出来事の記録を残すようにしている。日本での研修後は被災資料の修復を進めている。」とのことであった。

館長との懇談の後、修復室に案内された。修復作業は8名のスタッフにより行われている。作業台には見慣れた刷毛やヘラなど、修復の道具類が並ぶ。被災資料のクリーニング、錆びた金具の取り外し、和紙による裏打ちなどが行なわれていた。修復された資料を見ながら、スタッフたちと修復方法などについて意見交換を行った。当館で研修を行った、裏打ちや破れの繕いなど、修復の成果を確認できた。

同館修復室の抱える問題として、道具や和紙などの消耗品の入手難から、思うように修復を行うことが出来ないことが上げられた。使用しているのは日本の和紙、刷毛などであり、アチェでそれらと同等品が手に入るようになるか、あるいは日本からの入手経路の整備が必要であると思われた。



アチェ州立公文書館



ダマンフリ館長とリニィ氏



修復室の次に案内されたのは書庫であった。書架には、資料の入ったダンボールが整然と配架されている。書庫は、「以前は空調用のエアコンがあったのだが、津波の被災後はなくなり、現在手配中である。また供給される電力が不足しているため、入った後も安定した空調は難しいかもしれない」とのことであった。現在は通気のため窓を開けており、埃等が心配される。箱に入った津波被災資料を見せていただいた。洗浄された資料は、金具などに錆びが見られたが、利用可能な状態であった。早期のインフラ整備や空調設備の設置などが望まれる。



向かって左ユディ氏

翌27日、アチェ州立博物館を訪れた。ここは当館で研修を受けたユディ氏が勤務する施設である。来館時、館長が外出で不在であったため、まず修復室へと案内された。

別棟となった修復室では、刷毛と掃除機を使用した埃取りや、粉消しゴムによるクリーニング作業が行われている。また部屋の隅に、資料の薫蒸装置があった。タバコの葉、チョウジ、コショウを燻すことにより、資料を薫蒸する仕組みであった。

資料の繕い、ネットを利用した裏打ちなど、手際よく行われていた。修復された資料から研修の成果が伺えた。修復を行う上での問題点などについての懇談を行った。ここの修復室においても、資材が不足しており、特に薄手の和紙が必要とされている。中には薄い和紙がないため厚手の物で裏打ちされ、文字が見え辛くなってしまった資料もあった。



向かって右から2番目ヌルディン館長

この博物館においては、津波は前の川で遮られ、直接的な水による建物への被害はなかった。しかしその津波を引き起こした地震により、建物の壁や床にひび割れが出来、また動いてしまった柱など、いたるところに見受けられた。帰り際に、ちょうど帰館され見送りに来て頂いたヌルディン (Nurdin) 館長とお会いすることが出来た。

3. ジャカルタにて

2月28日、ジャカルタに戻り、翌3月1日はインドネシア国立公文書館を訪れた。はじめに修復管理者とアチェ被災資料の修復について懇談を行った後、真空乾燥装置へと案内された。この装置は被災後に JICA の支援により貸与され同館で稼働している。

インドネシア国立公文書館は、アチェにおいて津波で被災した土地収用台帳の状況を、2005年2月に調査を行った。翌3月には軍用機によって、ジャカルタに近い漁港のムアラバルの鮮魚用大型冷凍庫へと運び込み、マイナス30以下に急速冷凍を行った。その数はおよそ40×40×60cmの専用コンテナで、635個に至った。冷凍庫より30ケースずつを同館の真空乾燥装置のある部屋に運び込み、室内の冷凍庫に移し、順次、真空乾燥装置によって濡れた資料の乾燥を行っている。作業は順調に進み、我々が来館した時点で、残り28ケースまで減っているとのことである。真空乾燥装置から出された資料は修復室に運び込まれる。クリーニング作業を行った後、必要によっては修復が行われる。作業が行われている資料を見ると、資料の固着は見られず、無理なくページがめくれる状態となっていた。

この方法が濡れた資料へ非常に有効であると感じた。アチェの資料は、リーフキャストマシンなどによって修復後に、順次返却を行っているとのことであった。館内見学を終えた後、ウトモ（Utomo）館長とお会いすることが出来た。館長によると「今後、研修会などを行い、アジア地域における修復技術の中心的存在となるよう努力している。」とのことであった。



真空乾燥装置



ウトモ館長

4. 最後に

今回の視察によってバンダアチェでは、当館においての修復研修の成果が十分に生かされているのが確認できた。「第一回アチェ・インド洋学国際会議」では、当館と東京外国語大学が、アチェ被災資料の修復を、協力体制をもって行われたことが確認できた。そしてインドネシア国立公文書館において、被災資料への真空凍結乾燥法を視察したことにより、水濡れ資料に対し非常に有効な対処法であることが確認できた。

最後に今回のバンダアチェ視察に際し、通訳と現地での手配など、多大な配慮を頂いた東京外国語大学の関係者各位に、この場でお礼を申し上げます。

